現在のカペナウム

2025 年 2 月 23 日　説教「百人隊長の信仰」

ルカの福音書 7 章 1～10 節

6 章における平地の説教は「岩の上に土台を据えた家」のたとえ話で、結ばれました。岩に上に家を建てるとはみことばを行うことで、川の水が押し寄せてきても流れないように、人生の土台である、みことばを土台とすることを教えられたのでした。

１．百人隊長はユダヤ人長老たちを送り（1～3 節）

①カペナウムに入り（1）**「イエスは、耳を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムに入られた。」**

イエスは民衆への教えを終えられた後、カペナウムに入られました。カペナウムはガリラヤ湖の北西にある町です。新共同訳ではカファルナウムとあります。ここをイエスは「自分の町」（マタイ 9:1）としておられました。この町で多くのいやしのわざなどがなされました。この地にあるユダヤ人会堂は現在でも良いかたちで保存されていということです。

②百人隊長のしもべ（2）**「ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。」**

カペナウムにはローマ軍が常駐していたと考えられます。ローマ軍の百人隊長もそこに連なっていました。さて、彼の下で働き、重用していたひとりのしもべが病気になっていました。マタイの福音書では中風であったとあります（8:6）。ここでは「死にかけていた」とありますが、かなり苦しんでいたようです。

③しもべを助けに来てください（3）**「百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。」**

そんなところに、百人隊長はイエスがいやしのわざをされていることを聞いたのです。そこで、彼は近くにいて信頼しているユダヤ人の長老たちをイエスのところに送りました。そして、そのしもべの病をいやしてくださるようにと依頼したのです。

２．百人隊長の信仰（4～7 節）

①使いの者たちの訴え（4～5）**「イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願いして言った。『この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。』」**

ユダヤ人の長老たちは熱をこめていうのでした。つまり、このことをお願いしている百人隊長は、ユダヤ人からみると異邦人ではあるけれど、それをお願いする資格がある人だというのです。つまり、彼はユダヤ人を愛し、彼らのために、ユダヤ人会堂まで建てることに尽力してくれた人だというのです。その人が自分のしもべのことをお願いしているというのです。

②わざわざ来ないでください（6）**「イエスは、彼らといっしょに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人**

隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。『主よ。わざわざおいでくださいませんように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。』」

それを聞いて、イエスは彼らいっしょに出かけてくださいました。そして、百人隊長が住む近くまで来たのです。ところが、隊長はそれを知って使いを出して伝言したのです。その主旨は、わざわざ足をのばされないでください。その理由は、ユダヤ人でもない自分はイエス様を家の中にお入れする資格がないからだということでありました。

③ただおことばを（7）**「『ですから、私のほうから伺うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。』」**

本来ならば、自分自身が出向かなければならない無礼は、そんな理由からだというのです。そこで、伝言でお願いしたいことというのは、彼のしもべのために、おことばをいただけないでしょうか。そうすればいやされると、信じてそう述べたのです。

３．よくなった百人隊長のしもべ（8～10 節）

①行けといえば行きます（8）**「『と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別のものに『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば来ます。また、しもべに、『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。』」**

百人隊長が離れた所にいても、主の言葉で癒されると信じた理由を伝えています。それは、彼自身が軍の一人の長として、部下の兵士達に命令すれば、それに従うというのが当たり前であり、それが秩序であるからだというのです。まして、すべてを治める主がご命令されるのであれば、その通りになることは確実だとつたえたかったわけです。

②りっぱな信仰（9）**「これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来た群衆のほうに向いて言われた。『あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。』」**

それを聞いて、イエスは驚かれたのです。そして、一部始終をともにいて見聞きしていた、群衆に言いました。『このような立派な信仰は、イスラエルの人々の中でも、見たことがありません。まして、彼は異邦人なのにこれほどの信仰をもっているのです。』と。それほどに、百人隊長の信仰を評価されたのです。

③しもべは良くなった（10）**「使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた。」**

そして、イエスは彼の信仰のとおりに、離れた所にいる百人隊長のしもべに対して、その病をい癒すみわざをなしてくださったのです。使いの者たちが帰る前にそのことは、なされていました。

《結論》

今朝の聖書箇所を読み、注目させられる部分があります。それは、9 節です。イエス・キリストが百人隊長の言葉を聞いて驚かれたというところです。イエス・キリストの言葉やお働きをみて、周りの者たちが驚いたというのはいくつもあります。ところが、イエスが人の言葉や行動に驚かれたというのはあまりありません。それも驚かせた人物というのが、クリスチャンではないと思われる、異邦人である百人隊長であったというから二度びっくりです。実際、私達がこの短い聖書箇所を見るだけですが、百人隊長の信仰や人格にはびっくりさせられます。

どんなところにびっくりさせられるかといえば、彼は自分の「しもべ」の病気の癒しのために心血を注いでいます。「しもべ」（ドゥーロス）という言葉は奴隷という意味でもあります。情けのない主人であれば、しもべに対してそんなに配慮しません。ところが、彼はこのしもべの癒しのために、ユダヤ人長老たちをイエスの許に送り出して癒しをお願いしているのです。また、彼は 6 節において「あなたを私の屋根の下にお入れする資格はありません」と言っていますが、自分がユダヤ人でない者であることを前提にして、資格がないと言っているのです。ローマ人であると思われる彼が、横柄にではなく、むしろとても謙遜にそのように述べているところが、驚きであります。また、彼のことを彼の近くにいたユダヤ人の長老たちが、ユダヤ国民を愛する人で、ユダヤ人会堂を建てるのに貢献したと言って、高く評価しています。その面で、百人隊長は客観的にも相当の人格者であったと想像できます。

そして、何といっても、彼がしもべのいやしのために、イエスが言葉をくだされば、病人の近くにいなくても癒していただけるとし信じて、お言葉をくださいと願っていることです。これは彼が自分の権威者としての経験に基づきながら言っているのですが、その信仰に、イエスは驚かれています。いったい、こうした信仰やあり方を彼はどのようにして学んだのでしょう。一つにはユダヤ人たちとの交わりを通して聖書を学び、その新約聖書的響きのある預言書などから学び、さらにキリストのことを聞き及んで福音を知っていったのでしょう。神は格別な道筋で彼に「キリストへの信仰」を教えて下さったのです。なにしろあのベタニヤのマリヤですら「主よ。もしここにいて下さったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」（ヨハネ 11:21）と言っているくらいですから、百人隊長は神の恵みにより、この信仰を戴いたとしか考えられません。彼はクリスチャンであったといって良いでしょう。

私たちは、時代も国も経て、イエス・キリストを学び、その人格に接しているわけですが、 この百人隊長の信仰から学びたいと思います。主なる神は、現在を生きる私達に語りかけ、ことをなしてくださいます。主なる神の前に出て、自らの課題、困っていること、病気、将来などについて、「お言葉をください」と信仰をもって祈ることを主は求めておられます。この年も進み、来主日には、教会信徒総会も開かれていきますが、思い煩わずに、この信仰をもっ8564957869476499て進んでいこうではありませんか